慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ヴント」氏生理的心理学所載の変体精神現象：第一章 変体精神現象とは如何なるものを謂うか
Sub Title	
Author	稲垣, 末松
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.4 (1910. 10) ,p.459(91)- 467(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本國家と云ふ考ばかりでなく世界全般の利益の爲に、エスペランドと云ふやうな言葉を理想として、各國民の言葉が共通になる方が幸福であらうと信じて居る、突飛な考で理想であると言へば理想であるが、突飛であると云つて引込んで居つたならばいつの日が彼岸に達することが出來やうか。

要するに今日私は諸君に御研究を願ひたいのは家屋の問題、家族の生活と云ふ問題であつて、今日直ぐ生計すら立たぬ中に別居をなさいと御勸告する譯でも何でもない、世間の狀態、一家の經濟、各種の問題があるし、又今日の日本人は西洋人の知らざる家族生活の團欒と云ふものを樂み得る狀態であるが、是が永く續き得るかどうかと云ふことに考へ及んだならば、何か此際に所謂特殊の方法を用ゐるか、在來の主義を固守するか、是等が所謂諸君の御研究を願ひたい所以である、唯だ私は今日の日本人と云ふ者は西洋人に比して壽命の短いことも事實である、生産時期の短いことも事實である、此短い生産時期に於て確に吾々は餘計な時をを使ひ勞力を使つて居ると云ふことも事實である、而も中には積極に不經濟ながらも勞力を使ひ時を使つて居る者に對して、其權利、富と云ふものを消して掛かると云ふ連中が非常に多いと云ふ社會狀態にあると云ふことも事實であらう、是は研究と云ふ問題の外で、どうか吾々御同樣にせめては一本立になれば親にも迷惑を掛けぬ、友人にも迷惑を掛けぬ、少くとも自分は自分だけの力で立つて行かねばならぬと云ふだけに、せめて御互ひだけでもなつたならば、日本の爲に益することは甚だ少くはないだらうと思ふ、でく大雜杯な議論でありますが之で御免を蒙ります。

（六月十八日於理財學會大會文責在記者）

雜錄

「ヴント」氏生理的心理學所載の變體精神現象

稻垣末松

第一章　變體精神現象とは如何なるものを謂ふか

變體精神現象とは意識の狀態が通常と異なつた時を謂ふのであるが、其意識の狀態はどういふ時に通常と異なるかといふに、それには大凡二つの場合がある。一つは各個の觀念の性質に於て異常が來る場合であつて、例へば何も實物がないのに柿の形が見えたり、又は干してある浴衣が妖怪に見えたりするやうな場合である。一つは各個の觀念を連絡結合する仕方が通常と異なるといふやうな場合である。例へば數年前に死んだ人が今茲に出て來て數百里を隔てた人と對話をするといふやうな工合に、到底事實上結合して關係を附ける事の出來ない觀念をば相互に結合して關係を附けるのをいふのである。而して此二つの場合中第一の場合のやうに、各個の觀念性質に於て異常が來る時には之を幻覺及び錯覺と名けるのである。又第二の場合のやうに觀念の連絡結合の異常が來るのは吾人の睡眠中か又は催眠狀態中か若くは精神混亂の時かである。今吾人は茲に此五種の現象卽ち幻覺、錯覺、睡眠、催眠、精神混亂を論じようとするのであつて、又茲にいふ變體精神現象とは此五種を指すのである。但し睡眠や催眠や精神混亂の時には感情の樣子は一種特異になり、且その中に現はれる各個の觀念は常に幻覺、錯覺の性質を帶びるのである。從つて茲には先づ幻覺、錯覺から說明し始めよう。

第一　幻覺

幻覺とは以、前に得た事のある觀念をば何等の外界の刺激なくして再び想ひ起し、斯て宛ら實物に接する樣な心持をなすのをいふのである。從つ

て此際想ひ起された觀念は通常の場合に想ひ起された觀念と唯其の強度の點に於て異なる計りである。例へば以前紅葉を見た事があつて今其を想ひ起すならば、それは單に普通の觀念を想ひ起したのであるが、併し其觀念の度が甚だ強くなつて實際紅葉をまのあたり見るやうな心持になる事がある。それは卽ち幻覺をなしたといふのである。一體どうして此やうな幻覺は起るかといふに、それには大凡三つの原因がある、第一には大腦の膜や皮質に充血が來るといふことであつて、第二には「モルヒネ」とか「アルコール」とか「エーテル」とか「クロロホルム」とかいふやうな有毒物質が影響を及ぼす事であつて、第三には營養狀態が甚だしく變化したか又は營養が全然缺乏するやうになつたが爲めに來る所の腦髓の貧血である。此等三個の原因は孰れもそれ〴〵相異なるのであるが、而もそれが均しく幻覺といふ同一の結果を來すのはどういふ譯であるかといふに、それは此等の原因の爲めに本來多血である所の大腦の皮質に於て組織の分解物が澤山集積し、之が先第一に此皮質の興奮性を高め次に刺激其ものを自分で與へる樣になるからである。幻覺は種々の感覺に於て起る。其尤も屢々起るは視覺の範圍に於てゞあつて、此場合には種々の幻像を見るのである。次に之は聽覺の範圍に於てゞある。觸覺や嗅覺や、味覺に於て起る事は極めて稀である。此等觸覺、嗅覺、味覺に關する幻覺は通常大腦の皮質が甚だしく疾患に罹つた時に生ずる視覺や聽覺の幻像に伴うて起るのである。例へば茲にありもしない松茸が見えてそれがよい香を放つたり又よい味を與へたと思うて見たり、又はさはりの良い蒲團の上に坐つて微妙な音樂を聽いたりすると思ふやうな時である。之に反し視覺や聽覺上の幻覺は獨立して起る。而して幻覺は又此視覺、聽覺に於て通常多く起るのであるが、何故に此の如くなり、而してありもせぬものが見えたり聞こえたりするやうになるかと云ふに其原因は判然分らぬ。併し之に就き又多少分つて居る事もある。それは長い間閑靜な一室に茫然と

して居ると、聽覺上の幻覺が起つて人の聲を聞くやうな心持がしたり、又暗い所に長い間留つて居ると視覺上の幻覺が起り、種々の物が見えるといふやうになるのである。之は如何なる理由に基くかといふに、當該刺激が長く缺損して居るといふ事は感覺の中樞の興奮性を高めるからである。卽長く音を聞かないで居ると聽視中樞の興奮性が自然と高まり、又長く物を見ないで居ると視覺中樞の興奮性が自然に高まるに由るのである。されど又此反對に或る感覺器官を過度に刺激しても同一の結果が來るのである。例へば畫家が引續いて物を見詰めて居つて其をやめるといふと、視覺中樞が過度に興奮されるから何もない時でも種々のものを見るやうな心持がし、音樂家が音樂を長く聽いて居つてそれを中絶すると實際又音樂を聽くやうな感じを起すやうなものである。否同一の事物を引續いて長く感覺して居つた後は其事物其ものゝ觀念は甚だ活潑鮮明になつて幻覺に達し、實際其を見たり聞いたりするやうな感を起させる事がある。獨逸の生理學者の「ヘンレ」や又解剖學者の「マイアー」は日中に研究して居つた顯微鏡上の物體をば夜になつて暗い所でも十分鮮明に見たといふ事である。此等の理由であるから次の事實も說明されるのである。曰く、おしなべて視覺に於て幻覺は尤も頻繁に起る。何となれば視覺は過度に刺激せられて其中樞部の興奮性を尤も高め易いからである。此際又網膜に於て興奮が強く增す事も影響を及ぼすのである。此點からいふと網膜といふものは末端に置かれた中樞部といふてもよいのである。此等の事情の爲めに弱い幻像はかの回想表象卽ち想ひ出した觀念と同樣に、眼を閉ぢるといふと、より判明になり、此反對に眼を開くか又は日中の光線の所に出ると全然消失してしまふのである。之に屬する現象は普通健全な精神を有するものが寢入り前か又は暗い所で見る幻像である。此の如き時に見る所のものは時によると非常に強い回想表象である事もあれば、又時によると形や色などが絶えず變はる所の取留めもない形體であ

る事もある。併し此の如く種々のものを見たりするのは意志の作用と關係するといふ譯ではない。場合によると此際に弱い聽覺的刺激も一所になつて働く事あれば、又此刺激が獨立して働く事もある。例へば個々の文字とか語とかゞ大概は何等の連絡なしに將に寢入らうとする所のものゝ耳に響くが如きである。此等の音は急速に連續して聞こえたり、時によると宛ら漸次に遠くなる所の場所から來るかのやうに漸次に不明瞭になる事もある。此の如く漸次に不明瞭になれば通常は實際の眠りに移り行くの時である。察する所此の如く正常健全な時に於ても幻像が生ずるのは吾人の感覺器官特に目などが些少ながらも絶えず興奮狀態にあるからであらう。折によりては吾人が目を閉ぢるといふと暗い視界を生じて些少の光線が殘り其殘つた些少の光線其ものが直接に幻像を生せしめる事がある。併しかうなるといふと、之は最早幻覺の範圍を脱して錯覺の範圍に屬するに至るのである。

但し大腦の皮質に於ける感覺中樞の興奮狀態に、

して高度に達するならば幻覺は獨り暗い所とか目を閉ぢた時とか又は靜な夜とかに起る計りでなく更に日中の光線は十分にあつて、諸種のざわ〳〵して居る音は聞こえるといふやうな時にも起るのである。今や幻覺者は其幻覺的表象卽ち單に精神中に起つた觀念をば現實の覺官的印象と混合し、どれが單純な觀念でどれが眞の實物であるか容易に兩者を區別する事が出來ないやうになる。されど大腦の皮質の興奮狀態にして速に其度でも減ずるならば、其幻像は漸次に薄くなつて遂には消失する。「ニコライ」は曾て此種の幻覺を起したのであるが、彼れは又他の場合に於ては弱い幻像をば目を閉ぢた時のみに見、而して目を明けるや否や直に其が消失するといふ樣な目に出逢つたこともあるといふ事である。「ミユラー」や「マイヤー」のいふ所によると、寢入り前に生ずる所の視覺的幻像其ものも時とすると甚だ活潑になつて殘像を生ずる事がある。此の如き場合に於ては刺激といふものは視感覺の中樞部よりして遠心的に視神經の

作用によつて網膜に迄も達するのである。明るい日中に直觀的表象例へば栗とか林檎とかの觀念をば視覺的幻像と混合して宛ら栗や林檎の實物を見るやうな心持をさせるのも之と同一理に基くと假定し得るのである。又より強い幻像は目を運動せしめるといふと空間に於て其位置を變ずる事が屢ある。之は幻像を生ずる所の者の樣子からして明瞭に斷定する事が出來る。例へば馬の幻像を起したものは右から左とか又は左から右とかに目を動かして其馬の進行するのに附いて行くやうな樣子をなすのである。或は又此の幻覺者は其視線を向ける所のかしてや茲に火とか人間とか追ひ來る所の動物とかを見るのである。他の場合に於ては幻像は一定の場所に固定して居る事がある。されど此時に於ては外界の覺官的印象をば想像で以て異樣に變形し、かくて固有の錯覺其ものをなしたためである。幻像の中で眼を動かしても其位置を變せないものは唯暗い視界に於て發生し而して强さに於ては通常の想像表象に少しく勝り。且つ恐らくは末端神經の共働する事なしに起る所の尤も弱い幻像である。此種の幻像こそ回想表象と同樣に、眼を動かしても何等の影響を被らないのである。

幻覺が視覺に關して起るか又は聽覺に關して起るかは疑もなく一其興奮せらるゝ中樞の場所によつて定まる。二尙又此際に於ける刺激の强弱の度其ものも其幻像の性質に對して影響を及ぼすのである。卽ち其興奮狀態にして尤も强くあるならば其時には鮮明に輝く所の視覺的幻像か又は耳を聾せん計りの音卽ち聽意的幻像かが生ずるのである。かの幻覺を起す所の病人が何時でも赫々炎々たる火とか光とかを見るのも畢竟此理に基くのである。さはいふものゝ、幻像の性質はかの回想表象と同樣に、三各個人の觀念聯合の狀態によつても大に異なるのである。此證據には精神病者の幻覺は常に是迄の生活に於て生じた所の觀念や其感情的傾向と密接に關連するのである。例へば宗教家の幻覺は基督や天使や聖者と交際するやうな感じを起さしめ、迫害妄想に惱み居る憂鬱家は彼れ

を誹謗したり又は彼れに迫害を加へようと叫んだりする所のものゝ聲を聞くのである。之は取りも直さず幻覺が其平素の想像表象と密接に關連するのを示すのである。四多の場合に於ては幻覺の最近の原因は復現作用にあることがある。即ち意識中に浮出ずる事が出來る所の數多の表象中の孰れか一が聯想の法則に基いて喚起せられたり又は五種々の觀念を材料として宛ら正常人の想像作用に於けるやうに新奇な表象が構成せられたりする事もある。

されど幻覺者其人からいふと此種の現象は感覺の中樞部が其興奮性を增進したに由るのである。蓋し此中樞部の興奮性が高まり居るといふと、生理上の刺激は異常な强度に達し、かくて發生した幻像をして實物のやうに思はせたり。又は之に近いやうにならしめるに至るのである。かの精神病の初期に於て起つて其實單に回想表象が異常に强くなつたに過ぎないけれどそれを實物と思ふやうな場合は畢竟之に屬するのである。併し一定の安

想が既に發生して居つてそれが幻像の構成を支配し而して其妄想に一致するやうな幻像を發生せしむるやうになつて居る場合に於ては、該幻像は復現作用よりして發生するのである。但し此場合に覺官的印象が興奮者となつたなら、それは無論錯覺に屬するのである。

かやうな次第であるから、幻覺といふものは十中の八九は感覺の中樞部が其興奮性を增した時に起るのである。之は精神的に健全な者や又はそれに疾患のあるものゝ幻覺の狀態を檢すれば判明する。通常多少の變化が感覺の中樞部に於て蔓延するといふと茲に一定の幻像を發生せしむべき傾向が生ずる。併し此傾向がそれ〴〵特殊な形式に於て發現ずるのは一には何等かの聯想が起るに由る事もあるし、又一には外界の覺官的印象の來るに由る事もあるし、又時とすると此兩原因即ち聯想と覺官的印象との共に存するよりして來る事もある。此の如く幻覺は種々の原因共に働くよりして起るのであるから、之は一方に於ては想像表象と

關係し他方に於て錯覺も密接な關係に立つのである。殊に幻覺と錯覺との區別に至つては甚だ困難である。何となれば幻覺が生ずるのは中樞部が多大の興奮されたに由るのであるが、併し此の如く中樞部が多大に興奮されて居ると又錯覺も起るやうになるからである。即ち一度此の如く興奮されるといふと外界の覺官的印象から幻像が生ずる事もあれば又其印象がなくして單に復現的表象からもそれが構成される事もあるのである。此時には兩者は密接に混合する。其故は錯覺の場合に於て外界の覺官的印象に對して附加せられる所のものは凡て復現された材料であるからである。此故に兩者の區別は次の如く謂はねばならぬ。固有の幻覺は運動と共に其位置を變じ、而して一定の外界の覺官的印象に固著しない。然るに錯覺に於てはからでなくて外界の覺官的印象といふものが通常幻像の確固たる位置を定め、かくてどの邊に妖怪が居ると云ふ樣にするのである。されど末端神經に於て興奮でも增進し一定の度に達するといふと直にそれが刺激となるのであるが、之と同樣な事は感覺の中樞部に於ても起るのである。かの病人が一定の聯想上の關係なしに、火焰とか又は活潑に動く所の物體により圍まれたやうな感じを起したり。又は絕えず混雜した音響を聽いたりするやうな尤も强い幻像を生ずるのは此種の原始的刺激から起つたと認むべくあるのである。されど此の如きは是甚だ稀に起るといふやうな極端な場合である。從つて幻覺の十中八九は錯覺とたゞ量の點に於て異り、而して質の點に於ては異ならないと謂はねばならぬ。即ち吾人は若しも幻像を生ぜしめる所の覺官的印象にして氣付かれない程弱くあるか又は少くあるならば此時には之を幻覺と名けるのである。

第二　錯覺

錯覺とは外界の覺官的印象を待つて幻覺的表象を發生せしむるをいふのである。而して茲には此の如く錯覺の意義を確定するから、かの正常な構造官能を有する所の感覺器官に於て生ずる錯覺の

如きは茲に計入しないのである。此の如き錯覺とは、例へば目に於て誰しもなす所の誤つた測定、即ち同一の長さでも垂平線は長く見え、垂直線は短く見えるといふ事や、又對照されたが爲めに生ずる色の變化のやうなものである。錯覺に於ける根本的の精神物理的特徴は同化作用（アッシミラチオン）といふものである。即ち或る一つのものを他のものと速斷するのである。從つて茲にいふやうな異常にして奇異な錯覺は是幻覺的性質を帶びた同化作用であるといふ事が出來る。而も同化作用であるからこは又初等の聯想作用である。之は通常錯覺が前行する所の表象の中の一定のものに何等の論理的關係なしに起るのに徴しても判明するのである。即ち若しも覺官的中樞の興奮性が增進された結果として幻像を生ずる傾向が作られた時に正常な外界の覺官的刺激でも來るといふと、茲に錯覺は起るのである。此際一方には覺官的刺激の强度は增され、他方には知覺されたものが其質と形とに於て尤も異樣な狀態に變化せられるのである。例へば錯覺者は戸を叩く音をば雷の響と思つたり、風のさゝやきをば天の音樂と解したりするやうな者である。彼れに取つては雲とか岩とか樹木とかは奇異な形に見え、そこらを通過する所の人間は彼れを睨み付けたり又はしかみづらを爲したりするやうに思はれ、其談話は自已を誹謗する言のやうに聞こえるのである。而して外界の覺官的印象にして若しも茫漠不定であるならば、想像力は尤も自由に活動するのである。健全正常な精神を有するものと雖も其想像力を以て漠々たる雲の狀や遠山の不規則に重なつて居る有樣や又突兀たる岩などを種々の形に解するに徴しても知るべきである。之と同一の理由からしてすべて夜間といふものは錯覺の起り易い時である。平素幽靈のある事を信ずるものは暗夜に石や樹木の切株をば幽靈と認めたり、木の葉のがさ〳〵いふ音をば悲しい泣き聲と信じたりするのである。此の如くなるに就ても幻覺の場合に於けると同樣に。感情の如何が大に影響を及ぼすといふ事を忘れてはならぬ。夜間に錯覺を起すものは感情の沈下した臆病者に限つて居る。思慮深い者の目や耳には錯覺などは決して起らない。又兼々聯想して居る事も影響を及ぼすのである。例へば何れの國に於ても幽靈を信ずるものは最近に死んだ人を夜間暗い所で見るのである。

（未完）

露西亞及露西亞人

廣瀨哲士

近世歐羅巴の四大强國といへば英吉利、佛蘭西獨逸、露西亞を指すことは何人も拒まないところである。然るに此四つの國名を檢べて見ると一樣にノルマン人の名から出て居ることに氣が付く。まづ英吉利はアングルの名より來り、佛蘭西はフランクの名より出で獨逸（アルマーニュ）はアルマンの名から來て居り、今自分がこゝに說かうと思ふ露西亞はルスの名から來て居る。

偖其露西亞なる名の由て來るところを今少し悉しく調べて見ると先づ順序として最も此國に親しいリユーリックの名に遡らなければならぬ。此リユーリックはその昔ゴス人と共に西班牙にまで侵入したリユードリックと同樣に即ち佛蘭西でいふロドリグと同樣にノルマンの名である。此リユーリックが首領になつて一隊の人々と共に今の所謂ノヴゴロッド地方に移住し此地方一體を故鄕の名に因みて露西亞と呼ぶやうになつたのである。一體芬人やスラヴ人はスカンヂナヴヤを指してルスと呼むで居たのである。

如何なる事情の下にまた如何なる理由によつて彼等がノヴゴロッドの地方に移住するやうになつたかは一應研究する必要があるけれども少時後廻しにしてさて一國の國民性が形成せられる主因と看做す可き事には其國民の人種が如何なる種類のものであるかゞ第一に數ふ可きであらう。固より氣候風土も大なる影響を與ふるには違が無いけれども到底前者に及ぶ可くも無い。それから其國民の社會の道德や宗敎の及ぼす影響が甚だ重要視す